

# 玄宗「石台孝経」成立再考（続・一）

——文字資料の考察を中心に——

長尾 秀 則

一 はじめに

二 研究史の把握と問題解決の方法

三 筆跡研究

四 結 言

## （要 旨）

「石台孝経」のこれまでの研究史をみると、玄宗自身が碑の全文を書いたかどうかを疑問とする意見はあっても、それをさらに追求する試みはほとんどなされていない。

本稿は、「石台孝経」一文字一文字についての細密な調査・研究を基に、この問題に関連したいくつかの疑問の解決を試みたものである。

## 一 はじめに

前稿、〈玄宗「石台孝経」成立再考〉（『京都語文』第六号所収）に於いて、玄宗の閏歴と、その書の特質を探り、碑の形状を示し、建碑の理由を中心として考察を加え、「石台孝経」成立の一斑について管見を述べた。そして、その第六章で、「石台孝経」の疑義について述べ、「玄宗が、序と本文と注と批答とを総て自ら書いたとすることは、疑義を差しはさむ余地がある。」とした。

前稿では、歴史的考察から、この疑義を提唱するにとどめたが、本稿では、「石台孝経」一文字一文字についての細密な調査・研究を基に、この問題に関連したいくつかの疑問の解決を試みたい。

この碑は、現在も西安碑林に完存し、文字も完好である。しかし、碑面は、拓本を間にしてガラスで覆ってある。（一九八一年三月に筆者が訪れた際も、すでにこの状態であり、一年前にこのような形になったとの説明があった。）よって、拓本及びその印刷物により文字の比較と試みるしか現在、比較する方法はないのである。テキストとしては、『唐・玄宗 石台孝経（上・中・下）』（二玄社発行、書跡名品叢刊）を使用した。文字の対比としては、現寸が望ましいと思われるが、掲載の都合もあり、本稿では、70%の

縮小として示した。また、四面環刻であるため、第一面をA、第二面をB、第三面をC、第四面をDとした。文字資料左わきの記号は、面・行・列の順に表示してある。例えば、（A—1—1）は、第一面一列め一行めの文字ということである。なお注は、序・本文のマス目を四分割した大さのマス目に書かれているので、田のように、マス目に印をつけ、マス目のどこに文字があるかを示した。本稿末に〈参考〉として「石台孝経」四面の文字の分割を示してあるので参照してほしい。

## 二 研究史の把握と問題解決の方法

「石台孝経」に関して記録を加えている著録には、次のものがあげられる。

- ① 『宝刻叢編二十卷』（宋）陳思撰
- ② 『弇州山人四部稿』（明）王世貞撰
- ③ 『書画跋跋六卷』（明）孫鉉撰
- ④ 『珊瑚網書錄廿四卷』（明）汪珂玉撰
- ⑤ 『石墨鐫華八卷』（明）趙極撰
- ⑥ 『金石文字記六卷』（清）顧炎武撰
- ⑦ 『觀妙齋藏金石文考略十六卷』（清）李光瑛撰
- ⑧ 『來齋金石刻考略三卷』（清）林侗撰
- ⑨ 『金石統錄四卷』（清）劉青藜撰

⑩ 『金石存十五卷』(清) 吳玉搢撰

⑪ 『金石萃編百六十卷』(清) 王昶撰

⑫ 『話雨樓碑帖目錄四卷』(清) 王鯤撰

⑬ 『関中金石記八卷』(清) 畢昶撰

⑭ 『金石文鈔八卷統鈔二卷』(清) 趙紹祖撰

⑮ 『古墨齋金石跋六卷』(清) 趙紹祖撰

⑯ 『梅溪居士縮臨唐碑題跋二卷』(清) 錢泳撰

⑰ 『平津讀碑記八卷統記一卷』(清) 洪頤煊撰

⑱ 『雍州金石記十卷』(清) 朱楓撰

⑲ 『関中漢唐存碑跋一卷』(清) 王志沂撰

⑳ 『関中金石文字存逸攷十二卷附石刻書法源流考』

(清) 毛鳳枝撰

㉑ 『陶齋藏石記四十四卷』(清) 端方撰

㉒ 『弗堂類稿三十一卷』姚華撰

その中で、⑪『金石萃編』巻八七は、經と注との校訂を中心に、最も詳細に述べられている。しかし、これら先人の著録では、序・本文・注・批答、ともに玄宗皇帝の自筆としており、へはたして玄宗皇帝自らが筆を執って、「石台孝經」碑をすべて書いたかどうか」という疑義は述べられていない。つまり、これら先人は、序・本文・注・批答、ともに玄宗皇帝の自筆と考え、疑問としなかったのである。

ただ、伏見冲敬氏は、『西安碑林』(西川寧氏編・講談社)

の解題で、

この孝經の本文と注とは、古くから玄宗の「御書」といわれているが、実際に皇帝自身が筆をとって全文書いたかどうか疑問である。李齊古の上表にも「義展睿詞。書題御翰」とあるが、これは、本文が皇帝の著作であり、題字が皇太子の筆であるというのであろう。最後の批答は玄宗の宸翰であろうが、これと本文とは用筆の特徴がちがうように思う。西川博士も異筆説であることをうかがった。

と述べ、疑問とされている。

筆者も、批答については、文字数も三十八文字と比較的少なく、王羲之とその骨子において似ている書風からも、玄宗の宸翰であると思う。しかし、序と本文と注については、(玄宗「石台孝經」成立再考(前掲書))で述べたように、疑義を差しはさむ余地があると思う。

また、西林昭一氏は、『唐 玄宗 石台孝經(上)』(二二)玄社発行、書跡名品叢刊、一二八頁)の解題で、この問題にふれ、

私には当否を知りたい。ただ、王世貞は「紀太山銘、唐開元帝の製および手書なり。あい伝えて燕許その辞を修し、韓史その筆を潤すとす。故をもつて文は頗る雅馴にして猥弱ならず、隸法は小しく東京を變ずとい

えども、最も機勁たりて、古意を饒にす。云々」(前掲書「唐玄宗御書太山銘俊」といつて、太山銘は、韓契木・史惟則が玄宗の手書を潤色した、という伝承を是としているから、これと同様のことがこの碑にも行なわれたと考えられなくはない。史惟則の大智禪師碑、あるいは梁昇卿の御史台精舍碑銘は、結構用筆ともことによく似ている。もとより玄宗の隸書をよくしたことは信じてよからうが、楊貴妃を得た悦楽の日々に、こうした大作を、終始貫注して書きえたらうかとの疑いも生じ、あるいは御注もだれかの潤色を経ていると考えることもできよう。

これまでの研究史をみると、玄宗自身が全文を書いたかどうかを疑問とする意見はあっても、それをさらに深く追究する試みはほとんどなされていないのが現況であると言えよう。

この問題を解決するには、筆跡を細密に調べ、天宝二年(天宝四年あたり)を中心に玄宗について詳しく調査し、一方で、玄宗の代行をする可能性のある当時の隸書の名士について調査し、あわせて集字の技法の可能性について検討する必要があると考える。

今回の筆跡研究で、これらすべてを明らかにするつもり

はないが、わかることだけは、明確にしておきたいと思う。

### 三 筆跡研究

筆跡研究をしていく上で、今後明らかにしたい問題点をいくつかあげておこう。もちろん最終的に解明したい疑義は、(玄宗自らが、序・本文・注・批答を全て書いたかどうか)である。

① 一文字一文字は、活字のように、同じ文字のくりかえしなのかどうか。

② 序・本文と、注とで違いがあるのかどうか。

③ 四面環刻であるが、面により違いがあるのかどうか。

④ 避諱欠筆は、どのようになっているのか。

以上の四点をまず明らかにすべく、考察に入りたい。

①の解答について——一文字一文字は活字のように、決まった文字を使用していない。すべて、一つ一つ異なった文字が使用されている。よって、集字の技法の可能性は極めて低い。

「安」を例にとってみよう。(図1参照)「安」は序・本文に、七例。注に、五例ある。概形はほぼ同じであるが、細部は一文字一文字すべて異なる。特に、横画の起筆に注目してほしい。また、「女」の三画で囲まれた三角形の形と大きさに注目してほしい。また部首の「宀」に注目する

と、二画めと三画め、序・本文では接している例と接していない例（B-13-11・C-14-2）があるが、注ではすべて二画めと三画めは接しており、②の解答を示す部分もみうけられる。特に、（D-4-22）の注の例では、筆順・字形の変化がみられる。つまり、「ㇿ」と一画めの点と「女」の一画めが連続して書かれている。この様な例は、唐楷の「九成宮醴泉銘」や「伊闕仏龕碑」の「安」にみうけられ、漢碑にはその例をみないことから、唐楷の影響がここに表れているのではないだろうか。

「家」を例にとってみよう。（図2参照）「家」は、序・本文に、六例。注に、五例ある。「安」同様、概形はほぼ同じであるが、細部は一字一文字すべて異なる。また「安」同様、部首の「宀」に注目すると、二画めと三画め、序・本文では接している例（A-9-16・C-10-36）と接していない例（A-7-11・C-13-9・C-15-27）があり、微妙な例（B-12-24）もある。注ではすべて接している。（C-15-34は微妙）。

文字数が多いので、すべてを図に示せないが、「孝」と「経」を例にとってみよう。（図3参照）因に、「孝」は、序・本文に、四十四例。注に、四十四例。「経」は、序・本文に、十一例。注に、一例ある。どちらも概形はほぼ同じであるが、細部は一字一文字すべて異なる。「孝」の

場合、波発のある横画の起筆に注目してほしい。「経」の場合、八・九・十画めの横三点に注目してほしい。

もう一つ、「具」を例にとってみよう。（図4参照）「具」は、序・本文に、二例。注には例がない。ここで決定的に、二例で違いが存在する。（A-10-37）の「具」は、（B-10-12）の「具」より、一画多い。つまり異体字が使用されているのである。また細部の造形も異なる。「目」に注目すれば、（A-10-37）はたて長の長方形に近いが、（B-10-12）では頭の大きな台形となっている。また、波発の起筆も異なる。なお、漢代の「石門頌」・「史晨碑」では、（A-10-37）のように一画多い造形をとっている。この様な、異体字を使用している例に、「広」・「開」（図5参照）などがある。因に「広」は、序・本文に五例。注に四例。「開」は序・本文に二例。注に例はない。

②の解答について——すべての文字で序・本文と、注とで違いがあるわけではないが、何文字かで、決定的に違いがある場合が存在する。序と本文とでは、文字の大きさも同じであり、特にこれといった相違点はみられない。

「海」を例にとってみよう。（図6参照）序・本文では、すべて「海」を使うのに対し、注ではすべて「海」を使っている。因に序・本文の例は、四例。注は、三例である。ただし、（D-1-38）は、「海」を意識しているようにも

みえる。思うに、総じて細かい字は細部が判別しにくいいため、判別しやすく、書きやすい字形がとられているように思われる。また、場合によっては、省略という形で表現された例もあるように思われる。

また、「皆」を例にとってみよう。〔図7参照〕すべて、細部は異なっているが、序・本文では、すべて「皆」を使用し、注では、「皆」が一例（A-16-13）あるのみで、あとはすべて、「皆」という異体字が使われている。因に、序・本文の例は、三例。注は、十二例である。中には、（A-18-13）のように下部が「日」ではなく「田」になっているものもあるが、おそらくこれは、誤字にあたるのではないだろうか。なお、漢代の「乙瑛碑」には、注の用例と同じものがみえ、「熹平石經」には序・本文と同じ用例がみえる。

③の解答について——特に、A・B・C・Dの面の違いによる相違点はないように思われる。石碑をみると、明らかに野を引き、文字のわりふりを考えて刻されている。第一面から書きはじめたであろうことは想像できるが、刻させるのは、何も、第一面からすべきものでもないと思われる。「石台孝經」が肉筆でなく、石に刻された文字であるため、時間的な経緯は、碑面からは読みとりにくい。

ここでは、「日」を例示しておきたい。〔図8参照〕序・

本文では、二十三例（うちA面六例、B面五例、C面九例、D面三例）。注では十例（うちA面一例、B面二例、C面三例、D面三例）。A↖D面まで、「日」は広く分布し、序・本文と注それぞれにある。序・本文では、第二画にあたりがあるものがほとんどであるが、（C-6-28）や（D-4-45）のように、あたりがまったくないものもある。また、注では、第二画にあたりがあるものがほとんどであるが、（D-5-11）のように、あたりがまったくなく、第一画と接合しているものもある。（因に、漢碑ではこれらすべてのパターンが存在している。）そのように、細かな差異はあるものの、総じては一樣の物である。どうしてもA↖Dの差異を述べよというのであれば、D面には、イレギュラー的な文字、言いかえれば、楷書的な隷書が、散見されるように思われる。また文字のバランスも、A面↘B面↘C面↘D面と悪くなり、あせりや、疲れが感じられてしまうのは、筆者だけであろうか。

④の解答について——筆者の調査では、「淵」（高祖）・「世」（太宗）・「民」（太宗）・「治」（高祖）・「泯」（太宗）「民」に関係して）においてそれぞれ、総て一画が欠筆されている。また、「顯」については「顯」となっており、最後の二画が欠筆されている。それぞれ一例ずつあげておく。〔図9参照〕

#### 四 結 言

筆跡研究の結果をもとに、ここに一応のまとめをする。  
判明したことは、

① 「石台孝経」一文字一文字は、活字のように決まった文字を使用しておらず、一字一字、書かれた文字を基に刻されている。よって、集字の技法により作られた可能性は極めて低い。

② 「石台孝経」の序と本文とは、文字の大きさも同じであり、特にこれといった相違点はみられない。

③ 「石台孝経」の序・本文と、注とで決定的に違いがある文字が、いくつか存在する。

④ 「石台孝経」には、異体字が多数あり、中には誤字と認められる文字も存在する。

⑤ 「石台孝経」は、四面環刻という特殊な形式の碑であるが、面による大きな違いは、文字としてはない。

⑥ 「石台孝経」は、「淵」・「世」・「民」・「治」・「泯」において、それぞれ総て一画が欠筆されており、「顯」については、最後の二画が欠筆されている。

①～⑥の結果が、〈玄宗自らが、序・本文・注・批答を全て書いたかどうか〉の解答を直接導き出せないまでも、明らかになった事実である。

本稿を書くにあたり、「石台孝経」の序・本文・注のすべての隷書を対象に、字典を製作した。未完成であるが、作品をただながめていたり、臨書するだけでは気づかない多くのヒントを私に与えてくれた。今後は、玄宗の他の諸碑との文字比較などに発展させ、疑義解明に活用したいと考えている。

#### (付記)

本稿は、佛敎大学、平成十三年度特別研究助成(個人特定研究)による成果である。

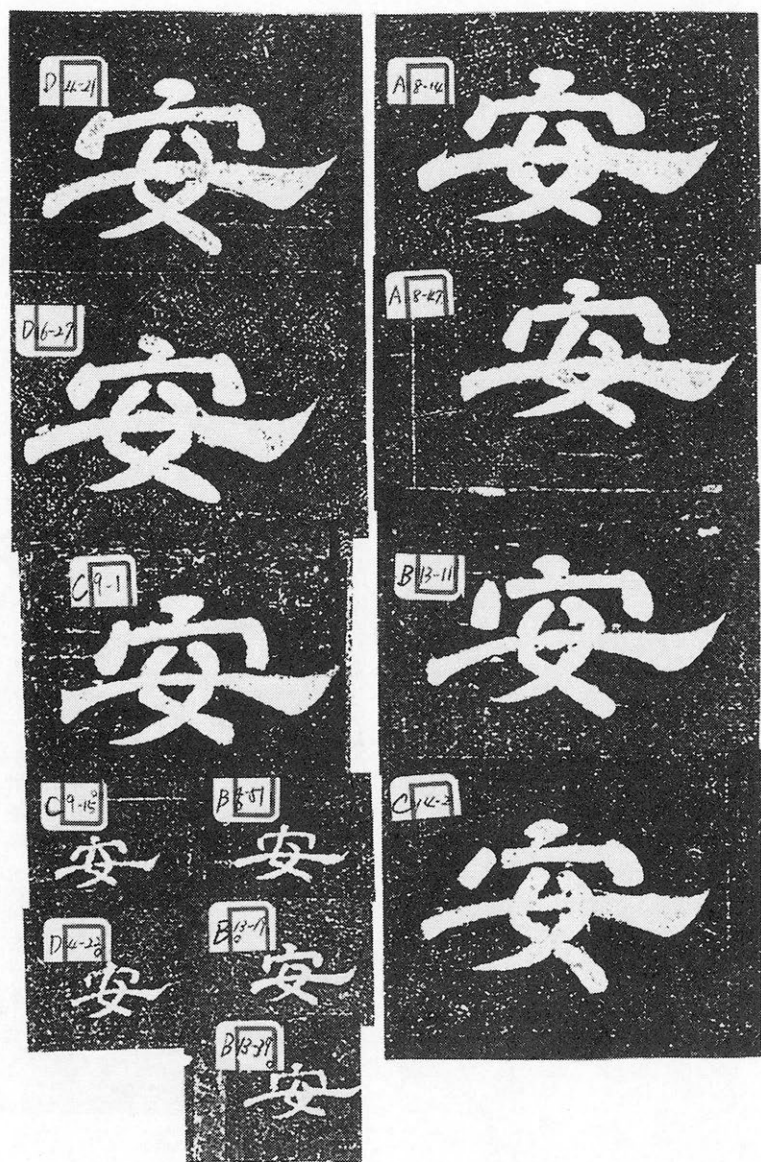


図 1



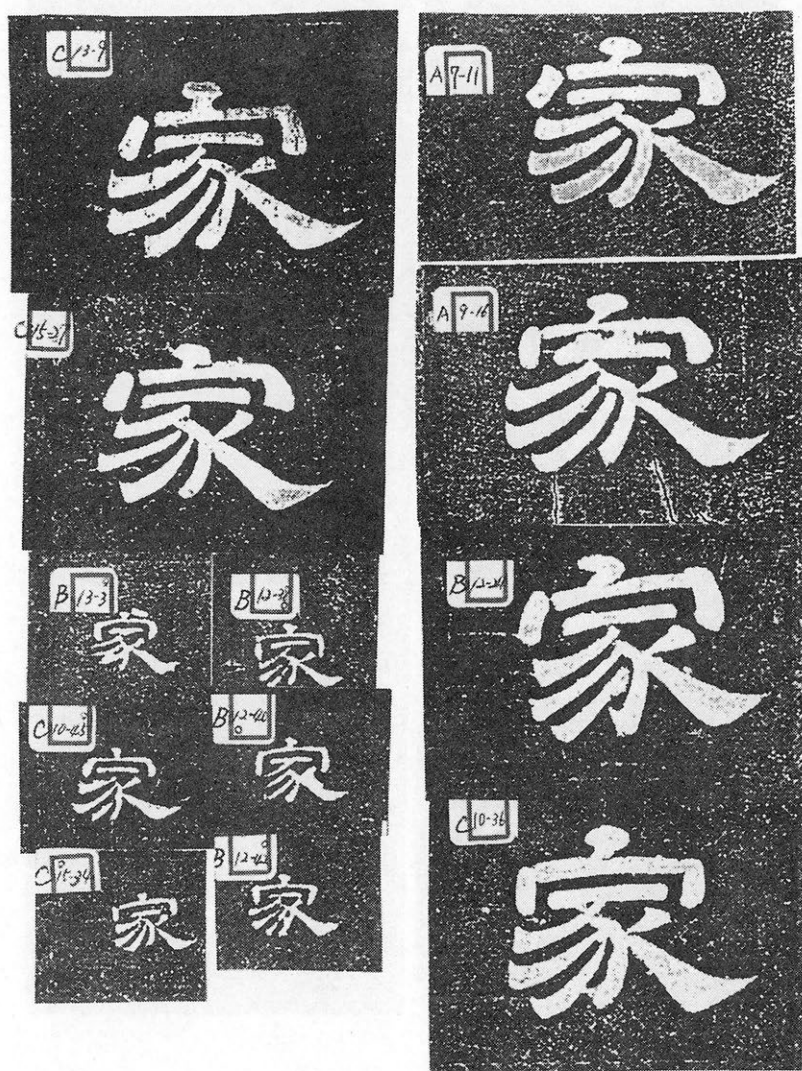


图 2



図 3

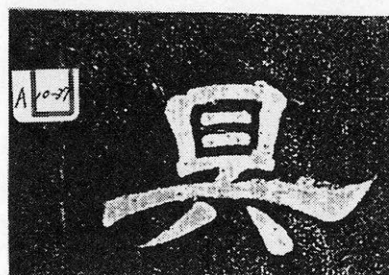


图 4

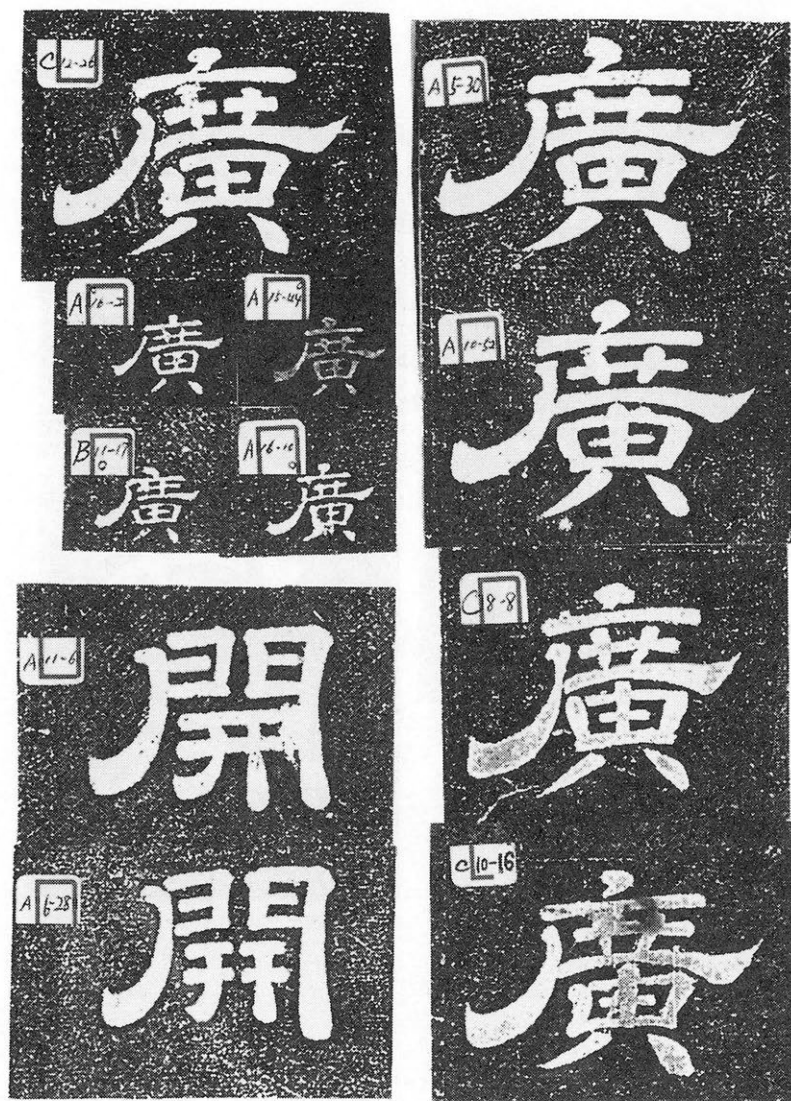


図 5



图 6

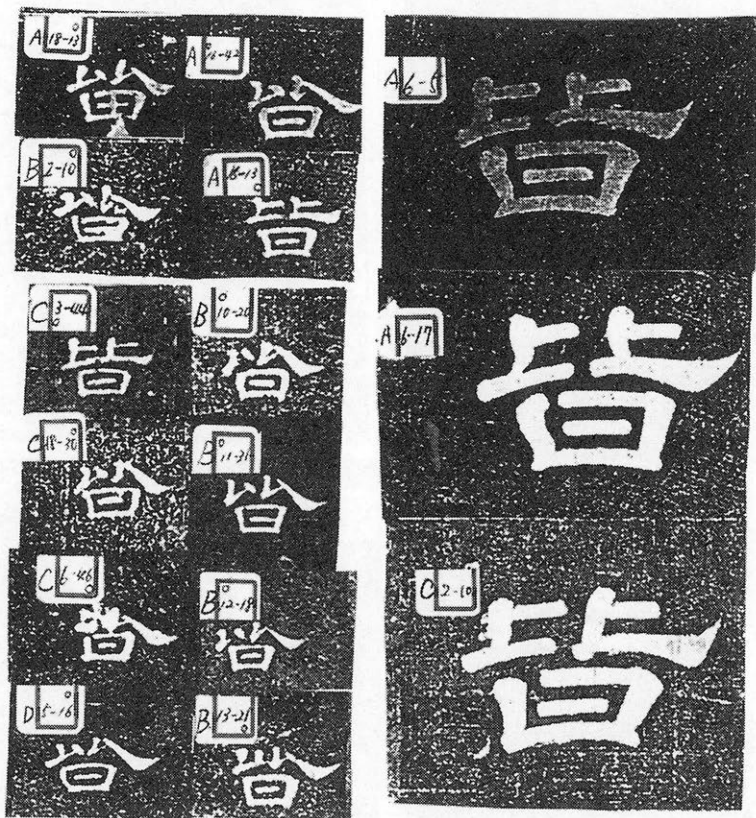


図 7



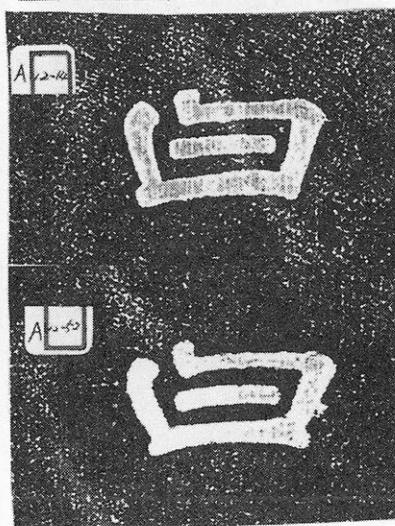
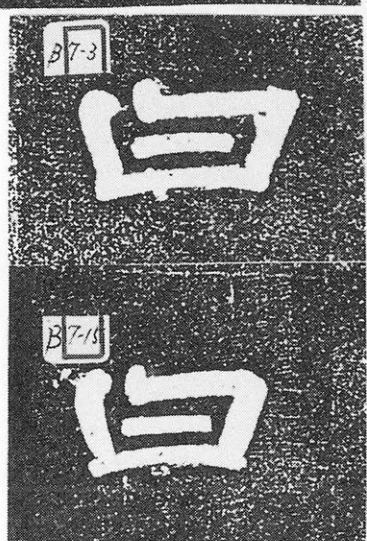
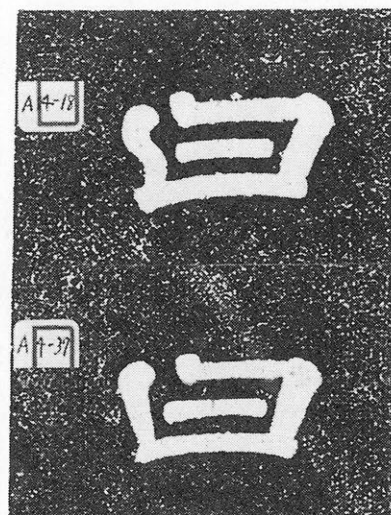
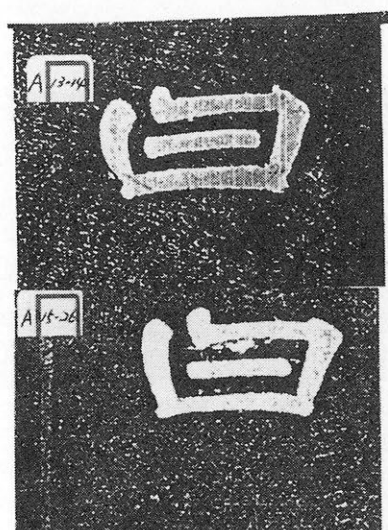


图 8

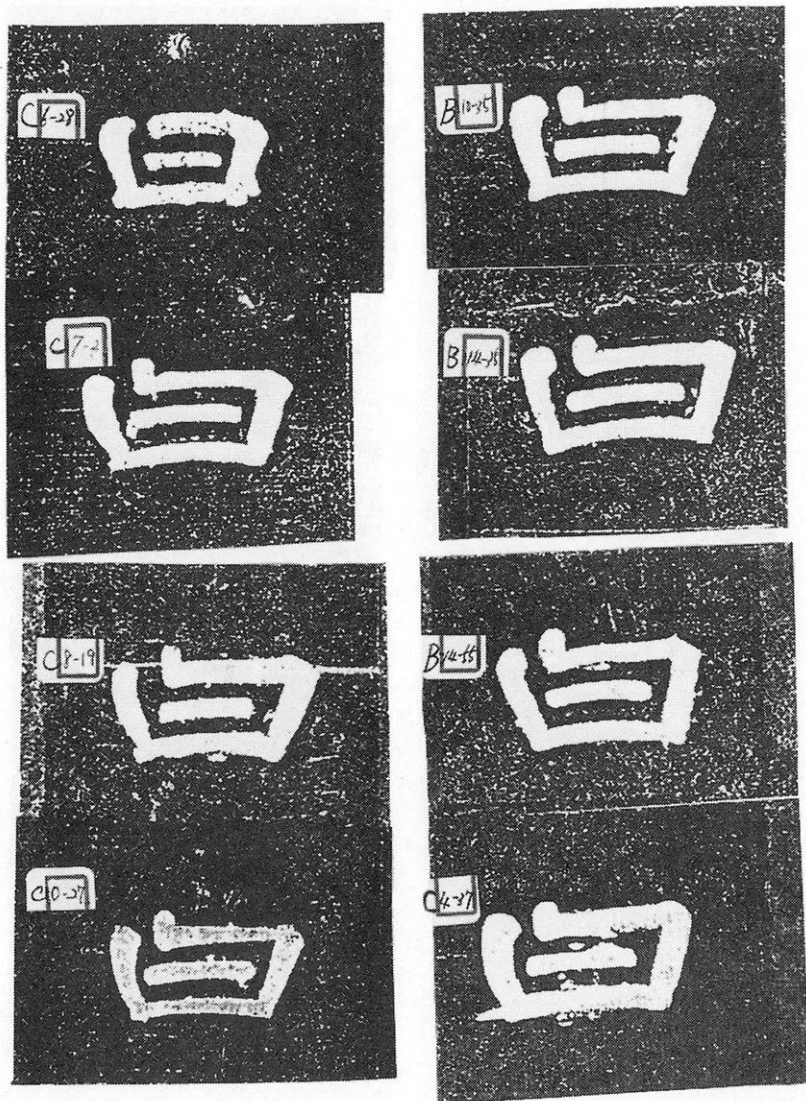


図 8



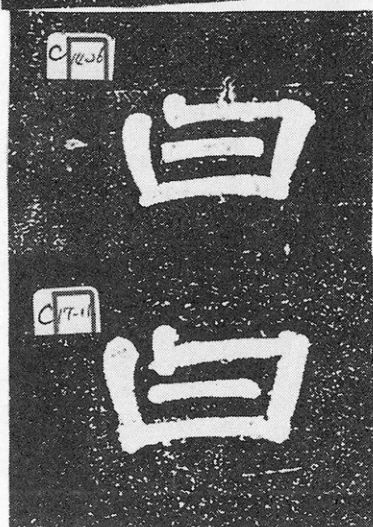
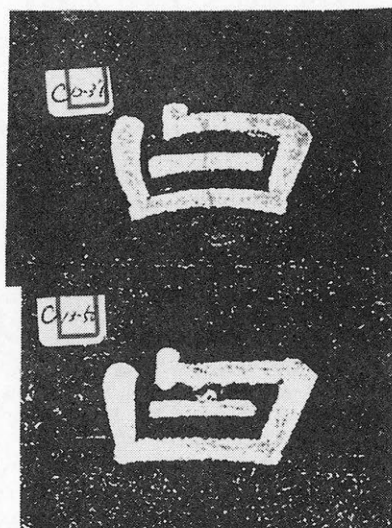
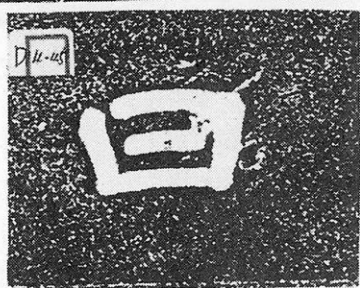
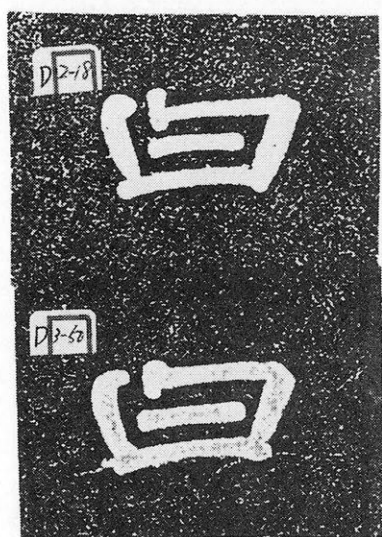


图 8

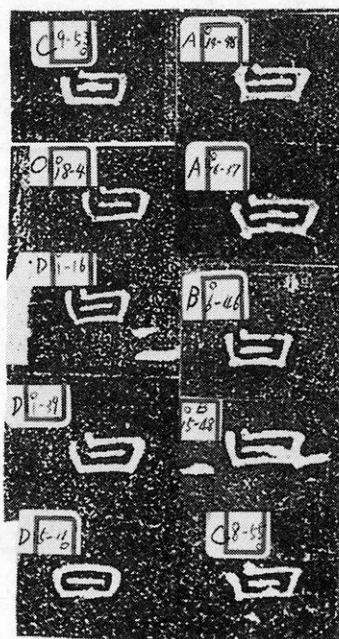


図 8

治



B-8-24

淵



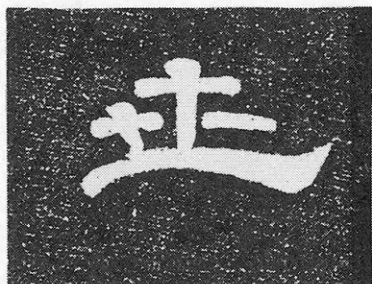
A-18-35

泯



A-5-53

世



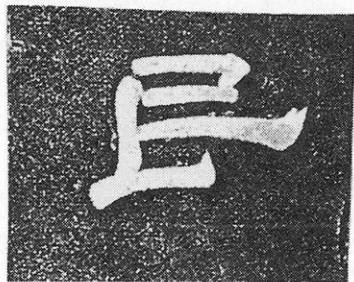
A-14-13

顯



A-14-15

民



A-12-26





